動脈からあふれ噴いたかのような濃さのCrimson Red、奥底に燠火のごとく玄く昏鬱の赭みを孕み、合成樹脂により造られたかのよう人工的な濡れ光沢を帯びて、鮮やかな生々しさ、蛋白質性の物質塊とは思えぬ色彩の諧調。

彝之イタルは緋髪をかき上げ、気取ったポーズで顎を上げる。次に指先でギターのペグを回し、弦を調整した。窓より校庭を見下ろし、再びギター・ヘッドに視線を戻す。夏の陽射しに炒られ、光を反射させるペグには髪を肩にまで垂らし、落ちるまま鎖骨の上に渦巻かせる自分が映っている。鍍金された金属に特有な即目的燦めきを恍惚として眺めた。

フィンガーボードには目をやらずに指を走らせ、即興する。弦の震えが空気を介してピックアップに伝えられ、電気信号に変換されると、コードからエフェクターを経由し、歪んだ爪弾き音に変じてマーシャル・アンプから響き上がった。硬く乾いた、物質的な音である。

備前や美濃や信楽などが焼成の段階で自然に生じさせる火色や亀裂や小孔などの鑑賞に近い悦びがあった。言葉に尽くせない他者性の妙、無表情さの深玄、非情性の快さがある。

唇だけで作る、歪んだ笑みを独り浮かべた。この乾いた硬さはピックアップの位置を高めに調整して弦に近づけた結果でしかない、と。

初めて試みたオープンDチューニングであった。弦を押さえない状態（開放弦）でDのコード（D・F♯・A）を構成するように調律することだが、演奏に際しては指の動きが普段とは異なってくる。音触も違う感じがした。試しにいくつかコードを鳴らしてみる。

「未経験の領域が人を高揚させるとは、まさにこう云うことだな。実際、人に聴かせられる域にまでならなくとも、自分のうちではこう云った状態のうちが最善で、この領域が神聖不可侵なんだ。『聖性は脱目させる』、か。

ふ。奴の科白だな」

それは友人の一人であった。

考えていたリフをいくつか試してみる。今度は指板を見ながらであった。悪くないと思える。だが自分が作ったものは客観的に判断することが難しい。他人の評価を気にせず、自らの感性のままに創るものが芸術と云う安易な考えもあるが、彼は浅薄なオリジナリティ至上主義に晰らかなる似非と不可能性とを感じていた。オリジナリティはありえない。オリジナルとは著作権上の便宜でしかない。

「録音再生してみれば、客観的に聴くことができる」

イタルは尖った線で素描されたカリカチュアであった。

痩せて尖突した肩、肘や膝もまた尖っている。硬くて薄い胸板から流れ落ちるラインは凹んだ腹で大きく内側に湾曲していた。背に萌え始めた翼のような肩甲骨の盛り上がりのラインは流れ落ちて外側に湾曲する背骨のラインに繋がり、胸板から腹筋へと抉れ落ちるラインとの微妙な、ユニゾンともハーモニーともつかぬ相応類似を成していた。

彼は緋髪を振って細長い首をねじり、再び窓の外を見やった。白っぽく乾いた校庭の土が熱気に揺れている。学校の敷地を囲むコンクリートの塀に沿うように植えられた樫や欅の木々が校舎から正門へと続く通歩路に深い日陰を与えていた。今度は窓のすぐ下から話し声が聞こえる。さらに首を伸ばして下を覗き見る。

路にいく人か同学年の女子たちが出て来ていた。賑やかに喋っていた。イタルの眼には一人だけが留まっていた。

楽夏（らっか）が歩く。鼻梁と上唇とを尖らせている。シャンパン・ゴールドに燦めく髪。小麦色の膚で、制服姿に飾りのないビーチ・サンダル履いた素足。それが男子の眼を惹くことを計算し尽くした選択だ。

イタルは一度眉を顰め、慎重に無表情を装いつつ、眼のみで軌跡を追った。

彼の諸感覚は彼女によって汎濫する。靡く髪から次々と零れる光の燦めきや真っ白いブラウスのひらひらした半袖が做す微妙な襞は、彼にとっては古典期のギリシア彫刻のように美の規範（カノン）としてイデアの世界から舞い降りたに等しかった。時の中に永遠性を留め、彼女の人格に関係なく、独自の存在であり、彼に無際限なる空想の膨らみを与えるイマジネーションのアーカイブであった。

それは一つの真理であり、人間が森羅万象に対して無意識的に期待する正理明叡なる本質性を裂いて哄笑する、粗暴な、人情など一瞥もしない、暴力的な実在である。FORCE である。

イタルにとって彼女は生きている陀羅尼（ダラニ）だ。または森の奥深くの磐に刻まれた、解読不能の古代文字、現代でも午前二時に魑魅魍魎やら地霊やら魔神やらが光芒とともに現われる、いにしえの魔法陣であった。

その未成熟な細さを残す手脚のように彼を点火するマッチ棒なのだ。その『存在』はチャンネルを啓く伝達物質に等しく、イタルは脱分極化して発火現象（インパルス）となる。

発火のための記号であった。その歩み、造形、揺らぎ、色彩、視覚に訴える触感の香気など、それら一切は光燦であり、神から齎された聖なる、典籍の上の列なるラテン語文字であった。

金箔の上に荒々しく残された墨痕のように現実的（リアル）であった。

従って彼は未だかつて声をかけたことがない。しかしながら時々空想してはみるのである。たとえば校舎の隅に呼び出す場面などを。

楽夏はしたり顔で現われるのだ。

「なんなの？」

「俺はおまえに惚れている」

「へえ、そうなの、告白しているんだ」

ここでイタルは落胆してみせる。たとえばこの場面では『気持ち悪いよ（キモイ）』と嘲笑されるのを期待していたことになっているからだ。その落胆の装いはスノビッシュなものとして彼のナルシズムを満足させる。

一通りその味覚を堪能し終え、さらに睥睨するような眼つきを装って言う。

「奴とは別れろよ」

彼女は双眸をくりくり動かし、堪えていた笑いを噴き出す。

「ふうん。なんだ、そうくるの。思ったよりつまらないね」

そう言って笑いを浮かべながらぷいっと振り返って行ってしまう。この一連のシーンを微妙に変えながらいく度も反芻し、楽しむのだ。

イタルはその反芻を今再び堪能していた。あの瞬間に、見透かすかのように活き活きと双眸を動かす様子が堪らなかった。無慈悲な非情性、捉えられなさ。理性を嘲る乾燥地帯の女神。

楽夏は地中海の色に似たコンタクト・レンズをしていて、その双つの眸は蝶々の装飾が附されたラピスラズリのアンティーク・ジュエリーのようであった。マスカラに延長されて大きく反った睫が蝶の触角であり、グロスの燐光を放つ瞼が羽根で、南米の鮮やかな蝶がラピスを飾るかのようであったからだ。宝飾で作られた聖なる紋章、その中央で眸の虹彩が做す放射状のデザインは太陽コロナのごとくに、瞳孔を囲む聖なる剣に見えた。彼女は聖女でもなければ偉大でもない。その象形が魂の救済者たる聖なる偶像であった。神の手になる秘蹟であった。

彼はさらに深く瞑想する。そしてリビアのアテナを脳裏に現象させる。

アテナはギリシア神話における智慧と戦闘との女神として知られるが、起源の一つに南方渡来説を持つ。リビアのトリートーニス湖の辺で生まれ、クレタ島に渡り、次いで現在ギリシアの首都であるアテネに定住した、と云う説がそれである。

通常はアテナと言えば白皙の女神像を思い描くが、その説に従うならば褐色の処女神アテナ（アテナ・パルテノス）を空想せねばならない。眦のくっきりした黒い巻き髪のパラス・アテナ。史実においても紀元前四〇〇〇年ころからリビア人のクレタ移住が始まり、エジプト第一王朝の時代であった紀元

前三〇〇〇年ころにナイル川の西方のデルタ地帯から女神信仰を持ったリビア人らがクレタ島に逃れている。その後に彼の島でミノア文明が生じていることを考慮すれば、イタルの想像は自ずとクノッソス宮殿に描かれていた、通称〝パリジェンヌ〟の姿とも重ならざるを得ない。その時代及び風土への空想が駈られる。単純でいながらさまざまな滋味を孕み、諸感覚に満ちた地中海性の官能。素朴で含蓄に富んだ美しく、開放的なフォルム。

〝パリジェンヌ〟と楽夏とは似ても似つかない。だがイタルにおいてはそのイデアが彼女の肖像に投影される。なぜ楽夏にそう云うイデアを投影するかはわからない。だが或る日、なにかが惹きつけ、それを強要したのだ。理由はわからない。

或る人が愛され、或る人が顧みられないのは道徳や精神の高貴さによるものではない。人間は平等ではない。本来ならば彼女のように愛されるべきであったたくさんの女の子たちがいたはずであった。だが実際にはそうならない。その理由は人間の理解を超えている。

この世で成功することのすべてが同じではないか。努力すらまた運命ではないか。努力した者は驕慢することなく、なぜその意志が自分に湧いたかを反省するべきだ。慮れ、たとえば物乞いとしての憐れみを強く誘うためだけに幼少時に四肢を切断されてしまったこどもたちが実在することを。その子らの中にスポーツ選手としての天性を持つ者がいなかった、とだれに言い切れるだろうか。

同じ人間なのに或る者は（苦節の末に）スター選手になり、または金メダルを獲得し、脚光を浴びて栄光をつかむが、或る者は罪も科もないのに努力への機会さえ閉ざされてしまう。もっと多くの英雄や偉人がいたはずなのである。

自然はなんと不条理か。楽夏に見出す魅力は皮膚やしぐさが有する自然の暴虐性であった。けして超えることのできない、現実の堰であった。理性的には理解できない事実の非情性であった。これに牽かれるように惹かれ、憑かれることは、喩えば死に怯える雷帝イヴァンが人民を拷問にかけて眺めることによって死を超克しようと試みるかの焦執に似ていた。

一人の女子が彼の注視に気がつき、指差して楽夏に教えた。女の子たちが一斉に視線をイタルの方に向ける。楽夏も彼を見る。イタルはそっぽを向くふりをし、なお横目で注視し続けた。女の子たちは再び視線を戻して互いに向かい合い、笑い声を上げた。楽夏だけが視線を戻す際に、意味ありげに眼差しを残しながら、アーモンドのようなかたちの眼とつんとすました鼻尖とをゆっくり横顔にする。そして二度と彼の方を向くことがなかった。

ほかの女子たちはもう一度、彼に一瞥を投げて顔を顰めてから、また楽夏の方へと向き直り、会話の続きを始めた。

堪能し、感歎する。

「いいね。

それさ」

イタルはダウン・ピッキングでガソリン・エンジンのストロークのような間断のない無機質なリフを刻む。どことなくフラメンコの拍子を連想させた。

「楽夏。この世は残虐な暴力だけの世界さ。だからおまえはそれでいい。古代アッシリア帝国のようにね。

おまえは俺の好意を感じて味わっているんだ。もっとうまみを搾るために挑発しているんだ。俺をじらしている。からかっている。そうさ、そう云うおまえが俺に好爽なんだ。おまえの『存在』はおまえの気持ちに関係なく、古代の女神のように柔淫で、残虐で、理不尽だ。俺の空想を無際限に膨らませる。素敵だ。俺はおまえを好きなんじゃない。おまえに触発された俺のイマジネーションに耽溺しているだけさ。

おまえからまともな科白なんか聞きたくない。そんな戯言を聞こうものなら、俺の女神は死んでしまう」

叭羅蜜斗（ぱらみと）は金色に染めた髪を自分で刈って長短ばらばらに突き立て、寝癖のようにしている。これがオリジナル・パンクだぜと嘯いて安全ピンのピアスを揺すり、へらへら笑う。

中学二年生でパンク・バンド『死す（シス）・ＲＯＣＫＳ』を結成し、高等学校進学後、真神高最強のネガティブ・パンク・バンド『叛（アンチ）』に最年少で参加し、ベースを弾いていたが、ほかのメンバーが卒業と同時に上京して活動を行うために強制的に脱退させられていた。パンクの匂いがあるだけで技術不足の叭羅蜜斗は学業があることを理由にクビとされたのである。

奇妙な名の所以は彼の生家にあった。畝邨（ほむら）村にある古刹貞観正國寺の住職は畏れ多くも摩訶般若波羅蜜多心経から採った名を息子につけたのである。なぜ檀家の顰蹙を買わなかったのかは人心の妙と云うものだろう。人はなぜ怒るかわからないようなことに憤り、怒るべきことに無関心である。

『ｖｖｗ（the quadruple of V：四倍の、或いは四重のV）』と云うバンド名は、Very Very Well - done に由来する。『ｖｖｗ』が転じて the quadruple of V とされるのは、ｗがｖの二重で、総計すると四重のｖを做すと云うところからきている。

叭羅蜜斗は『ｖｖｗ』のベースシストであった。イタルがヴォーカリスト兼ギタリストであ

る。よってこの日、ストロークを繰り返しているイタルを叱羅蜜斗は第二音楽室に入るなり、なじった。

「なんだよ、そのチューニング。

もしかしてオープンDとか、Gとかって云う奴？　それにしても弦が緩み過ぎてやしないか。しかも六弦を外して、キース・リチャーズじゃあるまいし。

レイジーなリフのフィーリングとしちゃあ、わるくもない。まあ、ブルージーと言えなくもないし。だがキャッチー過ぎるぜ。コマーシャリズムじゃないか。迎合主義は俺たちのコンセプトじゃない」

「莫迦な奴だ。相変わらずおまえにはなにもわかっちゃいない。

大衆迎合主義だと？　Cool だね。だいたい、まともな演奏もできないくせに、なにがアヴァンギャルドだ。前衛的って云うのはへたくそって意味じゃないようだぜ。

そもそも迎合主義を嘲ること自体が通俗的さ。そう云う類には飽き飽きだ。

いいか、アヴァンギャルドなんてちっともアヴァンギャルドじゃない。前世紀以来、すっかりスタンダードになっちまった。そう云う皮肉すら陳腐な風刺となって久しい。俺は常に清爽な空気が欲しい。俺が今試みているフレーズの狙いはアヴァンギャルドを強姦することだ。アヴァンギャルドに対するアヴァンギャルドだ。だからポピュラーでキャッチーなんだ。そう云うコンセプトさ。

ふ。この曲は音楽性じゃない、コンセプチュアルだ」

「むちゃ言うな。聴いただけでそんなこと、だれにもわからないだろうが」

「そうさ。

つまりそれが大衆迎合的じゃないって云うことさ。わかることがどうして重要なんだ。おまえは自家撞着だ。おまえの考え方こそ大衆迎合主義さ」

「イタル、おまえは凄く Cool だぜ。全く話にならない」

「それがバンドのコンセプトだろう？」

バンド結成を提案したのはイタルでも叱羅蜜斗でもない。もう一人の生徒、普蕭（ふしょう）と云うイタルの同級生だった。普く蕭然たり、それが彼の名の意味だ。イタルは彼の名にいつも蕭々たる雨を連想する。それはいつの年か国語の教科書のどこかで見た詩句であった。

と云うわけで叱羅蜜斗に続き、彼、普蕭も室内に入って来た。真っ直ぐな髪を顎の位置で切り揃えて縁なしの眼鏡をかけ、嘴のように人を刺す鼻と、いつも眉根を寄せた凝視の眼とを携え、神経質そうに痩せ過ぎた少年だった。

「いいから、イタルの好きなようにやってみよう。それから決めればいい。観念を振りかざして論じ合うことになんの意味があるか。僕らは現実だ。

現実でしかいられない。それにともかくも。

人のことが言えるか、叫羅蜜斗。君のベースだって、コードのルート音を半ミュートしながらゴリガリ、ボテボト、ってピッキングをしているだけじゃないか。なんのアンサンブルにもなってはいない。

いや、だがそれでいいんだ。

そんなことは僕らには問題じゃない。君らに声をかけたのは音楽的なアプローチにうんざりしていたからだ。もうなんども言っているとは思うが。

関係ない者同士がぶつかることで予想を裏切る曲が生まれる。違和感、異質感、なにより異物感、しかも金属的な、乾いた非情な感じ、そう云うのが快感になる」

この中でバンド経験が初めてなのはイタルだけだった。音楽への関心など一向見せなかった彼がフォークギター一本を手に独りで唐突に路上ライブを始めたのは、ほんの数ヶ月前だ。

最初はロバート・ジョンソンを耳で聴いただけのでたらめなコピーで、よく人前でやれたものだと感心するほどの酷さだった。だがそんなことを気にする彼だろうか。構わず叫えた。かつてアメリカ南部の農園にいた黒人たちの間で今に謂うブルースがホラーと呼ばれていた史実を彼は意識して忠実に叫えていた。

むろん田舎の畦道でやっても仕方がない。その後の彼の発言とは矛盾するが、彼は演奏活動を地元ではなく、安房市内の神中州中央公園まで出向いて演奏した。尤も通っていた真神校が市内にあったので、普通に通学する日には単に行き帰りの道筋でしかなかったが。

当然のごとくに帰宅途中の生徒らの眼に触れた。普蕭はしばらく聴いていた。彼は或るバンドを辞めたばかりだったのである。そのバンド名は『ＲＺＤ』、同じ学校の二年生で草馬と云う少年がリーダーをするユニットで、正確に言えばバンドのリーダーが彼であると言うよりはバンドが彼の附属であった。『ＲＺＤ』と云うのも実は草馬のあだ名である。強いナルシスムを持っていた彼は自らＲＺＤを名乗り、また人にもそう呼ばせていた。五歳になったときからである。個性的かつカリスマ性もあり、バンドもライブ活動のないうちから地元アマチュアの間で既に評判になっていた。そんな有望バンドから普蕭は敢えてドロップ・アウトしていたのである。ちなみにＲＺＤは楽夏の彼氏でもあった。

遂に或る日、公園でのでたらめなイタルのライブを聞き終えてから普蕭が言う。

「君はバンドでやった方がいいようだね。

僕がドラムを叩こう。叭羅蜜斗も誘ってあるんだ」

普蕭はこの中では唯一まともな音楽教育を受けた人間だった。楽譜が読めた。三歳の頃からピアノやバイオリンを習わされていた。とは言え、それも小学四年生で終わっている。イングヴェイ・マルムスティーンの光速のギターを聴いて以来、音楽への嗜好が転向してしまったのである。だから本来はギターを担当したい人間であった。だがイタルも叭羅蜜斗も正確なドラム・プレイをなせず、選択の余地なく彼がドラムスの椅子に坐った。

そうまでして『ＲＺＤ』時代に寡黙な俊才プレイヤーで通っていた普蕭がイタルや叭羅蜜斗などに声をかけて『ＶＶＷ』としての活動を択んだことを、だれもが皆不思議に思った。普蕭はそんなことは意にも介さなかった。人の評価などいい加減なものである。だれもが自分のために評価する。だから自分のなす評価が一番論外だ。

初めて楽器屋の二階にあるスタジオを借りて音合わせをしたときは悲惨なものであった。まるで演奏自体に関係のない物体であるかのように即物的な削り音を刻む叭羅蜜斗のベース、バンド内で一番演奏経験のないイタルがたどたどしい運指で、弦すら押さえ切れずに音がぶれるギターを弾きながら、演奏のみならずヴォーカルまで担当するのだから論を待たない。キーの合わない歌声（歌うにつれて絞るようにキーが高くなる）が不整に断続するばかりであった。だが普蕭は大いに満足したものである。

「最高だ。抒情性の余地はない。非常にウェルダンだ」

以来数ヶ月、少しも上達しない叭羅蜜斗に比べてイタルはだいぶましになった。やがて彼はブルースの特徴を大仰にデフォルメするようになり、貯金を叩いてレスポールの中古品にギターを替えた。その頃からレッドツェッペリンを聴くようになった。携帯の着信音を『Whole Lotta Love』にした。

さて第二音楽室に入るなり、普蕭はドラム・セットに坐ると、いきなり両足でバスドラムに三連符を打ち、ハイハットを一発叩く。

「さあ、時間がない。今は議論のときじゃない。ハードボイルドで行こうよ。実践あるのみだ。練習を始めよう。違うか、叭羅蜜斗」

「ちっ。で、それがウェルダンだ、って言いたいんだろ?」

叭羅蜜斗がいつもどおり嫌そうな顔を偽装してぼやく。

街に『The Street ＢＬＵｅＺ（ブルーズ）』と云うライブ・ハウスがある。ポスターが貼られ、剥がされ、

いく重にも痕跡を残された壁の地下にある。安房市内の神中州にある風雨に晒された雑居ビルに過ぎないが、近隣市町村では唯一のライブ・ハウスであった。オーナーの八木周公（ひろきみ）は山羊髭を生やして喉仏の飛び出た痩せ過ぎの五十代、長く垂れた眉毛の下から弛んだ瞼に半ば蓋われた眼で人をにらむ名物男だ。

演奏者を常に県内のアマチュア・バンドに限っているのも、商売度外視の彼らしいこだわりだった。基本的に未成年をステージに上がらせないが、午後五時から六時までの開店前一時間を解放し、高校生以上で二十歳未満のバンドに演奏の場を提供していた。演奏者のために観衆が必要であると云う考えから、営業時間ではないその時間帯に一般客が入場することを許し、料金も取らず、ドリンクも販売しなかった。

ただし未成年バンドなら無条件と云うわけではない。月に一度、その同じ時間帯に行われる公開審査に合格したバンドに限られていた。審査員はむろん八木独りである。

合格できるのは一回につき一バンド限定で、合格者がないことも多い。だが一度合格すれば、その後一年間は開店前一時間の出演権が得られる。既にいくつかのバンドが登録されているが、登録バンドは互いに日程調整し合いながら登録有効期間内に順次出演し、腕を磨くのである。

今月はともに初挑戦の『ＶＶＷ』と『ＲＺＤ』とが争う予定になっていた。

「わかっているさ」　叭羅蜜斗がベースを膝に置き直しながら言った。「俺はＲＺＤなんかに負けたくねえや。イタル、おまえがドラムを叩けねえから普蕭がやっているんだぜ。も少しCoolなフレーズを決めてくれよ」

「おまえのCoolがわからないね。

だいたいな、オリジナル・パンクやっていたくせに、アグレッシブで、かつアヴァンギャルドにか。意味がわからない。第一、おまえだってドラムスができるのか」

普蕭がスネア・ドラムを打つ。

「さあ、もう一回だ。『ＢＬＵｅＺ』のステージは僕らで獲る。それだけを考えるんだ」

イタルがギターのストラップを肩にかけて立ち上がる。

「ふ。よっぽどＲＺＤが嫌いになったらしい」

「あんな奴だぜ。当然さ」　叭羅蜜斗が唾を吐く。

「汚ねえからよせっていつも言ってんだろう」

イタルが眉を顰める。

彼はＲＺＤと同じ幼稚園に通っていた。その頃から既にＲＺＤは自らをＲＺＤと称し、ＲＺＤと云う人物になり切っている。憂鬱を気取った態度や時に凶暴さを覗かせる気紛れな、睥睨

するかのような眼差しも、既に当時からのものであった。世界を見ながら自分の内面世界だけしか見ていない、そう云うタイプの少年であった。

それなのに、或いはそれゆえに女子に持て囃される。イタルは楽夏とＲＺＤとの抱擁シーンを今日までいく度も思い描いては虐殺を眺めるように堪能することがあった。今もまたその矯激な焦燥性の天邪鬼に駈られ始めている。

狂ったように演奏が再開された。騒音が空間を充たす。典型的なガレージ・ロックの排気臭が空気を焦がした。熱汗で指が滑る。イタルも唾を吐いた。マイクに噛みつくような叭羅蜜斗のハモリは少しも合っていない。普蕭のドラムスだけが無慈悲な時計のように正確。軽い猫背でスタンド・マイクに絡み、声を絞るイタルの喉が嗄れる。

午後四時に練習を終えた。ドラム・セットは一々撤収すると大変なので置いたままにしているが、イタルや叭羅蜜斗は磨いてケースにしまう。その間に普蕭もメンテナンスをするのが常だ。いつも手入れがいい加減な叭羅蜜斗が既に終わらせて言った。

「まだ明るいぜ。どうするか?」

屈んでペダルを調整していた普蕭が髪を邪魔そうに払いながら顔を上げた。

「そうだな、駅前のＭｃにでも寄って打ち合わせするか、演る曲目も完全には決まっていないし。時間はあるかい」

イタルはケースのチャックを引っぱり上げた。

「わるいが、俺はちょっと行きたいところがある。叭羅蜜斗、明日、俺たちの教室に来てくれ。ミーティングは昼休みにしよう」

叭羅蜜斗は嘲りの笑みを泛べる。

「かまわねえさ。おまえが学校に来るならな」

イタルは楽夏が恍惚と抱かれる幻影を額に貼りつけたまま、落とさぬよう心を配し、ＲＺＤのアパートに向かっていた。イタルと同じ真神村に実家があったが、親に仕送りをさせて市内のアパートを借りていたのだ。通学のためと云う理由だが、村から市内までは独り暮らしを強いられる距離ではない。

電話を入れた。安易に幻影を実現したくなかったからである。

「安心しなよ。俺なら今は独りだ」

ＲＺＤは万事承知のふうで言う。神中州から数百ｍも行けば靭坊町、アパートはあった。錆びた外づけ階段を上がる。二階が部屋だ。鍵はかかっていない。入ると狭いキッチンで鍋とケットルとが、その先には六畳の一つ間があるばかりだった。

斜陽の差す中、ＲＺＤは彫像のようにしゃがんでいる。物憂い表情。ウェーブのかかったまっ黒い髪を無造作に分けて垂らし、どことなくラテン系の顔立ちだ。

部屋には楽器も音楽雑誌もタブ譜もない。バンド活動を思わせるものはノート型パソコンと手書きのノートとだけであった。広げられたままのノートには詩が書き殴られていた。

バンドで演奏する曲も詩もＲＺＤが独りで作るが、楽譜を書くことはできない。楽器も弾けない。彼の作る楽曲は音楽と云うよりかは、ＲＺＤと云う表現者の自己実現のための舞台装置でしかなかった。

部屋の北西側の壁に祭壇がある。古い仏壇に西欧アンティークの小さな燭台を飾り、非常に小さく緻密な受難磔刑の十字架像を立て、紫の絹で装丁された金字六つ折の摩訶般若波羅蜜多心経を六曲一隻の屏風のように後ろに配していた。最上段には深い青の額を持つフォトスタンドが置かれ、写真ではなく、かな文字ふうに非常に細い『非』（イ）と云う文字を入れていた。細かく切った金箔を繋ぐように貼り、かたちを倣したものである。そのフォトスタンドは以前にはなかったものだ。かつては雨に濡れるストーンヘンジの写真を小さなパネルにしたものが置いてあった。

この野郎はまたいったい、なにに到達したと言うのか、そんな疑問からイタルが訊ねるとＲＺＤは答えた。

「蛇だ」

「蛇？」

蜥蜴（リザード）じゃなくてか」

Vacant な駄洒落だ、実に Cool。イタルはそう驕慢し、顎を上げて満悦の睥睨をする。だがＲＺＤはその態度を無視するかのように虚空を凝視したまま言葉を返す。

「同じようなもんだ。蜥蜴の背色も青と銀とに玉虫のような移ろいを見せて捉えようがない。原蛇なんだ。わかるか」

「ふ。わかるか」

イタルは緋髪を振る。ＲＺＤが欣然たる微笑みを泛べる。

「神ではない俺の神さ。全宗教に対して邪教であり、あらゆることに異教なる神、非なる神だ。一向性がないと云うこと。だからすべてがその意図の下に生まれたとも言える。意向に叛いて存在するものがない。非ゆえの完全性、反逆者はない。神に非ざる神に背教者や異教徒がありえるか。非神は人間が持つ諸概念では捉えられない。人間の持つ一切の考えは常になにかであること、特定性を要するからな。直観でわかるだろうが。限界を区切らなければ一個の考

えにはならない」

「へえ、そうか。そう云うそれだって特定（なにか）じゃないのか。おまえの言わんとする意味も一つの『考え』って奴じゃないのか」

「当然。そのとおりだ。

だからどうだってんだ。変わりゃしない。

俺たちは概念なしでは語れないが、そうでありながらも、諸概念の最初を支えた原的直観がなんであったかを説明ができない。『動機』として先天的に植えつけられていたか、或いは純粋な根拠があるか、いや、そんな議論自体が虚しく思える。俺たちはわかったつもりでも実際には意味不明な言語を喋っているに過ぎないのだから。

俺たちは理解などしていない。ただ奔走しているだけ、ただ『納得』と云う心理状態があるだけだ。擦り合わせて馴染んだだけだ。まさに非神に妥当する。

つまり俺の神は整然とした概念じゃない。ぶっちゃけの現実だ。基督教の神やイスラム教の神、ユダヤ教の神のように偉大ではない。路傍の石だ。喜怒哀楽もない。人間とは違う。人間は不完全で、動揺し、不安定だ。怒りもするし、時に悲しみ、時に喜び、また嫉む。

俺の異形の神は憤らない。意に叛くことが起こらないからだ。悲しみも嫉みもない。喜びも同じだ。すべてが常に意に適うのに敢えてなにを喜ぶか。

神ならぬ神は一切を包括する。一切を拒まない。自在だ。どこにでもある。堰がない。形骸がない。特徴がない。特性がない。特定されない。了解に捉えられない。すべてをなし、固執しない。全的だ。主観性を持たない。脱自の極みだ。すべて捨て置く。好悪の情がない。全肯定だ。客観性の極致だ。全超越性だ。完全だ」

「ふ。そりゃよかったな。くだらねえ妄想だ。完璧に或る種の妄執だぜ。

まあ、いいや。で、なんで原蛇とやらには一向性がないんだ。なんで蛇が『非』なんだ」

「教えてやろう。これはな、自分で自分の尾を咬む蛇だ。メビウスの輪さ。表裏の一致、背反する者の合致だ。想像してみろ。その蛇は喰らっているのか、喰らわれているのか、喰らい尽くせるのか、喰らわれ尽くされてしまえるのか」

「またか。わけがわからない。

おまえの独りよがり的な論だ」

「ふふ。そうかな。原蛇はおまえと同じさ。すべての人間と同じだ。いいか、俺たちはそれがなんであるかわからないなにかを知っている。

だが知っているが、わかろうとするとメビウスの輪になっちまう。知ってはいるが、なにも

わかっちゃいない。説明を試みても、それはただ言葉を置き換えるだけだ。同義反復（トートロジー）だ。堂々巡り、永劫焦燥だ」

「くだらねえ、俺たちゃ全的で完全なのか」

「そうさ。またはそうではない。どちらかであるが、双方を網羅する。永劫に収まらないまま空転する。なにも知らないのに、なにかを知っていて妄執する。無知ではなく、非知ですらもない。左に逝けば左に逝くだけ。右に逝けば右に逝くだけさ。乾いた現実だ。それがすべてさ。路傍の石だ。

ふふん、どうだ。これは偉大なる発見、大いなる真理だぜ」

「ふ」

「イタル、忘れたか。俺たちゃ、小学校の低学年ぐらいからこんなことを大発見と称して繁く議論していた。なぜだと思う」

「知るか。

って言うか憶えていない」

「いいか、俺にはわかる。俺たちはな、満足できなかったのさ。幼いなりに空転していた。だから破脱したかった。だれだってそうだ。すべての存在はそうだ。すべての存在者は聖性を欣求する。巨大な空転運動の一員として脱目的な超越を志向する。かくして一切の現象が顕在し、世界はかくある。

それが空転の動機さ。俺には宇宙の膨張が自己超越の一形式に見える。生物の進化はまさにそれじゃないか。鳥類がただの跳躍であることを超えた最初の瞬間（きっとそれは極小さな飛翔だったに違いない）の超越感覚はどれほど自己肯定に満ちていただろうか。宗教的な、天啓をえたかのような、崇高で恍惚の瞬間、聖性を自己に直観した瞬間であったと俺は疑わない。そうやって世界は展開してきた。それらの総和として全世界は一向の脱自運動を繰り返している。それはただそれが目的で、それ以上それ以前の理由がない。俺たちには見出せないからだ（俺たちが見出すこと、それ以外の審査基準があるか。無明の闇に生まれ、無明に帰るだけの、暴力的な基準しか原的に俺たちには与えられていない）。

すべてが聖性、すべてが崇高、すべてが原蛇だ。現実はその現実性を維持し、常に俺たちに選択と忍耐とを迫り、かつ空性なんだ。無味で乾燥している。形骸を剥いで REAL になるしかない。

イタルよ、おまえは Ecstasy って云う言葉の意味を知っているか。自分自身の中から脱け出るってことなんだぜ。世俗的に生きることを粛清する」

「ふ。じゃあ、死ぬってことだな」

「そうだ。死ぬんだ。生音の逆さ吊りだ。世間で善いとされる一切の価値基準に異叛する末路を遂げることだ。世界の超越、いや、世界の存在そのものが超越行為だ。

おまえは死を思うか」

「いや」

「死に際に俺はなにを思うか。時々それを考える」

「死ねばわかるさ」

「そうだ。しかも迫っているぜ。感じないか。おまえは急かされている。矯激に駈られている。だから時々普通の自分が震えながら振り返るのさ。なにもかもが消えてなくなろうとする刹那、俺はなにを思うか、と。だがおまえの自然は非情で暴虐だ。惰弱を憐れまない。常に点火の状態だ。おまえは自分を牽き裂くことを欲している。おまえは自爆したいと欲情している。おまえの欲望の一切が炸裂だ。それが脱自への志向だ。

こどものときからずっとそうだったじゃないか。おまえはおまえ自身に異叛でありたいと切望している。おまえ自身への叛逆と云う自家撞着性の欲望にとり憑かれている。だからおまえは原蛇の精髄だ」

「ふ。冗談じゃねえ」

「ふふん。なんとでも言うさ。

一切の言辞は嘘だ。偽りだ。反吐だ。俺が形而上的なイデアの世界を渇望するのはその純粋な空気が黴や菌類のような湿った世俗的価値観を、真実だの愛だの家族だの成功だの名誉だの損得だの正義だの不当な仕打ちだのと云う、価値基準に支えられた世俗世界を殺戮する者だからだ。

わかっているはずだ、イタル。すべての価値はまやかしだ。騙されているんだ。この世で偉大なことは意味のなかった自己犠牲、犬死、非業横変の死、砂、路傍の石だ。いずれも世俗的価値に異叛する」

「ナルシズムの塊。欺瞞だぜ。

阿呆らし過ぎる」

RZDが薄ら笑いを浮かべた。

「最高の賛辞だ」

「だろ?」

「偽装者はおまえだ。

すべてはステージで明白になるさ」

イタルは立ち上がった。

「で？　それだけか。

ふ。

聞くまでもなかったな」

ＲＺＤのアパートを出た。思いに囚われていた。彼を捉えていたものはＲＺＤの言葉ではなかった。ＲＺＤの部屋にあったフォトスタンドの青だ。青はイーリヤを連想させる。懐かしくも、また今も切実に迫真する断片的な記憶。

思えば、あの頃はまだ七歳だった。

イタルが毎年夏を過ごしていた別荘の隣に新しくできた、白く尖った屋根の教会のような別荘に、彼女は或る日、家族とともにやって来た。双眸が青かった。美しい青であった。青とはなんと云う美しい色であろうか。

海を想わせる。

たとえば海鳥島のインディゴル浜から眺める海のL'azur（ラズル）だ。そこにはサンチャゴ爺さんのBar（バル）がある。白い浜から拙く伸び、上下左右に曲がったり傾いたりする、頼りない桟橋の尖にそれはあった。海に浮かぶ、と言えば詩的だが、浜に転がる流木で粗く組まれた貧疎な小屋でしかない。

桟橋もまた椰子の枝を粗綱で結わいただけの代物。嵐に繁く流されるが、爺さんはテキーラを呷りながら二日もかけずに再び組み上げてしまう。

屋根は椰子の葉を葺いただけのものだ。木洩れ日がこぼれ、潮風が通った。床材は大まかに成形されただけ。樹皮は加工するまでもなく、既に波に削られてしまっている。素足にひんやりした、それでいて或る種の温みとも言える木膚独特の乾きの軽らかさが心地よかった。それを楽しみながら見る海、その蒼、藍、紺、碧、青の燦々たる氾濫。

平和に満ちあふれ、穏やかでありながら激情に駈られたかのように天空へと響鳴し、成層圏の彼方まで駈け上がるかの光瀾であり、イーリヤの眸だ。

彼女の瞳孔の、生存を絶滅に至らせるまでに純粋なる、驚嘆すべき透明度である。百数十ｍ下の細石の凹凸さえ異様なまでの解析度を以てあたかも分厚いクリスタル・ガラスを通して見るかのように強く縁取り、鮮やかに、晰らかとする透明度の。

最も濃く高貴なる蒼を混えるそれは奥に蒼よりもさらに本質なる蒼である蒼藍を做し、その奥には眞髄である紫紺が燠のようにあり、燠火の奥に燠の燠たる炎の紺碧があり、その真央は青碧であり、蒼碧であり、藍碧であり、紺碧ですらあった。

イタルが彼女の双眸について想い泛べるのは、そればかりではない。

大きな眸をより大きく見せる、三十六枚の薔薇の花弁のような睫毛もまた現象するのだ。

白皙の皮膚に眺くように明瞭に浮き上がる強い黄金色の睫毛である。黒い睫毛よりも濃く両眼を縁取り、これに荘厳される眸は距離を炸いて迫るかのようであった。凛々と燦めく炯らかさ、西欧の大聖壇の薔薇窓を想起させるイーリヤの虹彩の、至聖の紋章を見るような壮麗さは真理、真実そのものであった。

彼のそう云ったイメージの起源は五歳にも満たない幼少時に見た古い装丁本の独逸語版『ウンディーネ』である。

それは古い小説だ。別荘に特にしつらえた父の書斎にあった蔵書だった。読めなかったが、歳月を経た皮革の装丁や挿絵が気に入っていた。

尤も書斎にあるものでイタルの気に入らないものなどなかった。獅子や翼ある牡牛や龍頭を持つ怪獣の彫りがある大きな楓材の机にクリスタルの文鎮、革張りのソファにキューバ産の葉巻が入った象嵌細工の小函、金銀嵌細工が入ったモンブランに皮革製ペッド、薄ピンクの入った金細工のペンスタンドとクリスタル&色大理石のインク瓶とのセット、アラベスク文様の鮮やかなクム産のシルク絨緞。これらに囲まれた書斎は当時の彼にとっては聳えるような樫材の書棚が並び、蒼古な雰囲気に包まれた独特の静謐の聖域であった。書籍を読むと言うよりか、頁をめくって眺める聖務を楽しんでいた。

書籍は聖職者イタルを守護する、歴史に刻まれた戦士たちだ。

トゥキュディデスの『ペロポネソス人とアテナイ人との戦史』伊訳版やサッルスティウスの『カティリーナ内乱記』パリ写本復刻版、オロシウスの『異教徒に反論する歴史』、作者不詳の『アングロサクソン年代記』、ヴァッラ『コンスタンティヌス大帝進状論』、ヘルダー『人類史哲学の構想』、ミシュレー『フランス革命史』、ブルクハルト『世界史の考察』等々。彼は背表紙を観覧するだけで恍惚とした。埃の燦めく古代の図書館で天窓からの一条の光を浴びながら黙々と書見する修学僧の陶酔を味わった。

『ウンディーネ』は水の妖精の悲劇物語だ。人間に恋をし、魂をえる（妖精はそのままでは魂のない、自然のように気まぐれで無慈悲な存在らしい）が、やがてその最愛の夫を殺さなくばならなくなる。そう云った内容だ。後に翻訳本で知った。美しくも哀しい妖精ウンディーネが

イーリヤのイメージと重なったと言うよりか、それを求めていて重ねたのだと言える。金髪碧眼であったと云う以外に両者に共通点はなかった。尤も今は思い込みで染められ、記憶は捏造され、定かではないが。

イーリヤは外国人夫婦の一人娘であった。父親はインド系、母親がギリシア系アメリカ人だ（と思っている）。母譲りの膚は白皙であったが、眼の大きさがインド風にエキゾチックだった。それを眼周のマロン色の暈と大仰な二重（ふたえ）のラインと邪教的なかたちを描く晰らかな眉とが装飾し、リビアのアテナの燦眸のようでもあった。

別荘は真神湾の海辺の高台にある。穏やかで明朗な真神の湾はわずかな砂浜を透き通った波が優しく撫でるほかは、白い崖が海に迫り、南フランス沿岸部のどこぞかに似ていた。

イタルは湾に浮かぶ安房島をよく眺めたものである。島と言っても松の生えた大きな岩でしかなかったが、その容姿は偉容であって、昇る朝に燦めく細波に独り立つ姿や夕日を浴びて沈と佇む茜色の美しさなど、いくら見つめ続けても飽くことのないものだった。

彼はイーリヤと彼女の家族とが越して来た日をはっきり憶えている。その日は賑やかだった。イタルは騒ぎを見ようと外へ出たものの、見たこともない目鼻立ち（田舎では外国人など殆ど見かけなかった）の人たちに吃驚し、慌てて家内に引っ込んだ。カーテンを微かに引いて様子を覗う。

そして彼女を見た。父親に手を引かれて眼を輝かせながら別荘に入るイーリヤの黄金の髪は眩いばかりであった。以来、彼は物陰に身を潜め、眺め続けた。話しかけることなどできるわけもない。いくらでも待ち、彼女が現われると隠れ、見つめた。

一度だけ言葉を交わしたことがある。イタルが独りで庭の土を蹴っていたときのことだ。突然声がした。

「ねえ、なにをしているの？」

愕いて顔を上げると、隣家と自家とを仕切る白い木柵に両肘と顎とを載せてこちらを見ているイーリヤがいた。面白がるようなその碧眼に捉えられ、隠しごとを見つけられたかのように烈しく動揺する。ともかくも言葉を発しなければならない。

「君は、君は日本語がしゃべれるんだ」

「あたりまえじゃない。私は日本で生まれたのよ」

「だって君は」

「ねえ、私、イーリヤ。あなたは」

「イタル、僕はイタルだ」

「ねえ、で、なにをしていたわけ？　それをさっきから訊いているのよ」
彼はなにをしていたのか思い出せなかった。だがイーリヤの視線をたどって自分の足下に眼を落とす。
「あ。これか。だから。
だからモグラさ。モグラを探していたんだ」
嘘だった。意味もなく土を蹴っていただけだ。
「へー、モグラがいるの！　すごい、どこ？　見つかった？」
イタルは益々赤面して俯く。どうにも応えられなかった。
「ねえ、イタル、どうなのよ、あなた、さっきからはっきりしないわ。ねえ、どうしたの」
涙が込み上げた。唐突に、虐待されたかのような、自らを憐れむ感情に支配された。そう云う状況を望んでいたからでもある。
「ねえ、どうしたの？
イタル、もしかして泣いているの？」
涙がさらにあふれた。恥ずかしくてなにも言えなかった。
「私がなにかわるいことを言ったの、イタル？　ねえ、そうだったのなら謝るわ。ねえ、イタル、はっきりしないわって言ったから泣いているの？　ねえ、ごめんなさい」
彼は応える義務を感じて努力し、どうにか返事をした。
「違うよ、泣いてなんかいないよ、ただ」
そう言って勢いよく手の甲で眼を擦り、無理やり顔を上げた。輝くイーリヤの眸。言葉が止まってしまった。燦然たる蒼碧が放射する聖なる紋章、形而上的な純粋性、真空である純粋、本質である真実、最も鮮やか、最も強く晰らかでそれ以外のものを薄く色褪せた影のようにしてしまうリアリティ、唯一この世で現実として存在するなにか、イーリヤ個人にもこの場の状況にも、いかなるものにも関係していなかった。ただイタルの深奥に原初からあり、生まれた瞬間に忘れられていた本当の自分、そう云う強烈な感覚である。射抜かれた。光燦にすべてが無みされ、彼は裂けながら飛翔し、砕け散って全宇宙に拡がった。
自分はまさにこのために生まれ、これだけが現実であり、後の人生はそれを追うための附録であり、エピローグに過ぎない、晰らかにそう感じたのである。それは刻印となって今も消えていない。
後の記憶はなかった。そこまでしか憶えていなかった。イタルは時折、記憶を反芻する。非現実的だった時代を、場面を懐かしむのであった。

そして彼は思い出す。あのとき以降、異様な幻想に囚われ、気がつけばそれに捉えられていることを。イーリヤの架刑である。彼女が磔にされ、火炙りにされ、悶絶死する姿である。幼少のイタルは人間性が剥き出しにされるその空想を畏怖しながら執拗に独りいく度でも思い泛べ、胸の裂ける陶酔を味わった。絶対に受け容れがたい動画であり、彼を生身のままで牽き裂いた。

公開審査はくじ引きから始まる。演奏の順番を決めるのだ。観る者の度肝を抜こうと計るバンドにとっては後でプレイするよりか先に演じる方が客席に強いインパクトを与えられると云う点で原則的な優位性を持つことができる。

「畜生！」

叭羅蜜斗が歯を噛み締めて悔しがった。くじで負けたのである。普蕭はむしろ傲然と顎を上げ、意に介さない様子。その眼は冷たくさえあった。指先でスティックを回す。

「関係ない。僕らが最高だ。聴く奴らを凍りつかせてやるだけさ。そうじゃないか、イタル」

イタルはそっぽを向いて無関心、無表情だった。呟くだけだ。

「ふ。

めちゃくちゃをやってやるぜ」

観客はまだ数人。だがＲＺＤのステージは凄絶だった。

ライトが落ち、ドラムスの大楽（たいらく）がスティックでカウントする、するや否やディストーションをかけた春慶（しゅんけい）のギターが音の洪水を起こす。大楽がバスドラムの上に三つ並べたタムタムを右から左へ連打しながら素早く移動、それを合図に春慶が大仰なストロークを交えながら速いリフをかき鳴らし、その疾風で見る者を薙ぐような金属的な衝撃波を起こした。数秒で突然それがやみ、ＲＺＤがポケットから紙を出して自作の詩を読み上げる。気の触れた古典劇俳優を気取っていた。それも数秒、言葉の途中でＲＺＤは薬が切れて禁断症状を起こした患者のように叫ぶ。

最初の曲は彼らのオリジナル『憂鬱なるＦ氏の優雅なシガレット・ケース』でネガティブ・パンク。題名と音曲とが全然合っていない。歌詞は放送禁止用語の連続で、すべて絶叫で押し通す。聴衆を圧倒し、一曲目が終わった。

「へえ、凄えもんだな。どうせまたラリってるんだろうぜ」

叭羅蜜斗が軽くそう言ってみせれば、普蕭も冷笑する。

「と言うか、相変わらずのナルシストぶりだな。安っぽいね。狂気や異常を気取っているのさ。大昔の莫迦な時代にありふれていたスタイルに過ぎない」

女の子が一人ステージに上がり、キーボードの前に坐った。それは（楽夏ではなく）黒髪の長い、見たことのない子であった。

鍵盤から幻想的なフレーズが霧のようにわき上がる。東欧の深い森に彷徨うような心地にさせられる。春慶が十二弦ギターを出し、エフェクターのスイッチを踏んで切り替える。大楽がクラッシュ・シンバルを撫でるように叩く。ベースの翔太は最低音部でメロディのようなラインを奏でた。ＲＺＤの歌はまるで朗読だった。やがて呪文性を帯びてくる。複雑に組まれたルーン文字の円陣が彼の背後に泛ぶかのようであった。静かに終わる。

審査時に演奏できるのは三曲までだ。春慶が六弦と五弦とを親指のつけ根でミュートしながら上下に刻む。そこにベースが二本の弦で做す和音を重たく絡ませる。目覚めたようなドラムスが加わると同時にＲＺＤのヴォーカルが入った。

沙漠の非情　風の乾き　軍馬の群れ　その鬣
炎が燃えて　黒く煙　陥落する城　トロイヤ
アキレウスが　膝を大地に　突いて　屈する
女が叫び　赤子が　叩きつけられ　虐殺の刹那
なにもかも架空　無から無に帰る　それだけ
愛も哀しみも　現実に呑み込まれるだけ
膝を屈するアキレウスの　微笑み　アルカイックな微笑み

ＲＺＤが顔を歪めて喚きながら烈しく髪を振る。マイク・スタンドを振り上げて叩きつける。それを待っていたかのようにギター・ソロが噴出した。リリカルな激情を孕んだ、なにか運命のような悲愴さを雄々しく湛えたフレーズだった。絶叫調の歌詞は聴き取れないが、イタルの脳髄は晰らかに『イーリアス』を泛び上がらせた。彼の脳内麻薬はヘレネをたやすくイーリヤに替えた。燃え上がり陥落する城砦は焼かれる磔刑のイーリヤだった。イタルの眼が現実に輝く炎を捉えた。それは彼よりも前列にいて躍り上がる楽夏の髪だった。ステージのライトを反射して跳ね上がる度に燦めく髪の振り乱れ、それが炎であった。絶望的な気持ちに襲われ、抜けるような爽快に魂を解放させられる。ディオニュソス神狂乱舞の秘儀祭だ。彼女の『存在』の『暴虐』、滑らかな金属上の粗い墨痕、それはあたかもステンレス製の板から突き出た奇岩

で、現実空間を紙のように千切る魔法の指であった。

手に取れそうだった。駈られる。込み上げた。

強烈な異叛性に捉えられたイタルは矯激な雀躁を帯びた自裂の欲情に衝かれ、火が点いたかのように人をかき分け、前へと突き進んだ。荒々しく人をどかせた。楽夏の右肩をつかみ、力任せに振り向かせる。左手で抑え、右手で髪を引っ張って唇を奪った。一瞬彼女は眼を丸くした。なにが起こったか理解できないようであった。彼は頬を張り手打ちされた。再び楽夏を引き寄せ、自嘲的な言葉を彼女の耳元で囁いた。

「ふ。

そんなに好かったか?」

「畜生、ざけんな」

彼女にもう一度、引っ叩かれた。周囲のいく人かがさすがに気がつく。イタルは傲然と周りを見据え返す。そして満足げに微笑む。Coolだ、叭羅蜜斗ふうに言えばな。

楽夏はリビアのアテナ・パルテノスではない。〝パリジェンヌ〟でもない。むろんわかり切っていた。だが俺はパンドラの匣を開けた、そう明確に自覚した。自裂跼顱、そのステージに到達したのだ、と。解放、清爽、明澄、聖青、身も裂いて邁むかの奮迅の気勢、脳内麻薬があふれた。畳みかけるように襲うライトの激しい点滅、RZDの絶望のような絶叫。シンバルの暴虐性が空気を破り、弦をかきむしるピックの苛烈な引っかき音が斬切する。

十分以上続いた演奏は飽かせることなくエンディングとなり、終了後も余韻でしばしの静寂。その後の喚声。再び訪れた静寂とともに、『VVW』の出番と相成った。

彼は彼女を突き放し、普蕭と叭羅蜜斗とが既に待っているステージの傍に向かった。

叭羅蜜斗は恐らく後年私にこう語るだろう。

「つまりそのときがはじめてイタルが楽夏に言葉をかけたときだったんだ。奴はそれからこんなふう言ったのさ。

『見ていろよ、楽夏』」

観客は少し増えていた。奇抜な髪型や服装をした連中ばかりだ。彼らもバンドを演っているのである。アーティストの方が純粋な観衆より多い。互いによく見知っている人間であった。

ああ、あいつも出て来たんだ、みたいな顔でイタルらを見ている。

「Cheapだぜ」

吐き捨てるイタル。沈黙。間のわるい沈黙だった。構うふうもなく、彼は意味不明な呟きを繰り返し、十数秒。

大音響が再び空間を圧した。愕いたことに第一曲目は『憂鬱なるF氏の優雅なシガレット・ケース』、『ＲＺＤ』が最初に演奏したオリジナルである。もしこれが『ＶＶＷ』に卓越した技倆があって『ＲＺＤ』を超えていたならそれはそれでアイロニカルな意味があったであろうが、晰らかに技術的にそんなレベルにはない。ぶざまな、愚行としか言えない行為。だれもが唖然とした。なにをしようとしているのか理解できなかったのである。

イタルは驕慢な異教の神を気取って大仰に緋髪を振り乱し、顔を顰め、舌を出して震わせ、唾を飛ばす。

演奏終了後、しらけ切った空気があるばかりだった。ブーイング以前の状態であった。彼は衆目を侮蔑するようにステージから睥睨する。それがなおさら滑稽で、ぶざまであった。叭羅蜜斗は山羊の角と耳とを持った淫猥なサテュロスのようにへらへら笑うだけ。普蕭は大いに満悦して叫ぶ。

「最高だ！」

すぐさまスティックでカウントを取る。二曲目だ。叭羅蜜斗が重たいベースの単音をティラノザウルスの足音のように刻む。イタルが緩やかで軽快なブルースのフレーズを爪弾く。が、唐突にテンポの違う粗いカッティングのリフを繰り返し始めた。ベースの音とは全然合っていない。ドラムが半拍ずれておもむろに立ち上がり、イタルが声を絞り上げるように歌う。

ロバート・ジョンソンの『Preaching Blues』だ。だが会場にいる人間はだれもその曲を知らない。演奏が終わり、再び息苦しい沈黙。普蕭がノーブルな鼻を突き立て堪能するかのように眼を細め、眉根を寄せる。まるで満足したメフィストだ。益々喜悦を隠せない。叭羅蜜斗は相変わらずへらへら、イタルがぼんやりなにかを考え込む様子で立ち尽くしている。

「ラスト！」

そう気勢を上げた普蕭がスティックでカウントを取ろうとした瞬間、イタルが唐突にリフを刻み始める。軽快な、歯切れのよいカッティングで刻まれるリズム。

叭羅蜜斗は愕いた。知らない曲だからだ。思わず普蕭の方を振り向いた。一瞬、呆気にとられていた普蕭だったが、すぐさまドラミングを開始する。慌てて叭羅蜜斗も追いつこうとする。CとFとのコード進行、シンプルな繰り返しでどうにかベースも間に合った。

君が好きでたまらない　たまらないほど好きなのさ

だけど君は奴のもの　奴こそ君の彼氏だから

俺の心は伝わらない　伝えることなどできやしない
だから歌うぜロックンロール　ロックンロールしかできやしない　Hey

ロックンロールはラヴレター　ロックンロールはラヴレター
ロックンロール・ラヴレター　Aha! Aha! Ahahahahh!

凄まじくダサい歌詞、軽佻な、他愛もない安物ポップス、聴いている者らの人種を考えれば最悪のチョイスであった。叭羅蜜斗はやや赤面し、普蕭は笑い出しそうになったが、それも凍りつく。イタルは身を裂くようにめちゃくちゃなソロを弾き始めたかと思うといきなりギターを振りかざし、ベース・アンプに叩きつけた。烈しい不協和音と電気的なノイズ、ギターのネックが折れる。弦だけで繋がっている。彼はその折れたネックをアンプに突き刺した。さらに耳を劈くような電気的ノイズに、ハウリングのような鼓膜の痛くなる音が響き渡る。イタルは放心したように客席を見渡した。時間が止まったような顔、顔、顔。その中に楽夏の眼差しを見たような気がした。眼を凝らしたが、暗くてもうなにもわからない。残響の耳に残る静寂があるだけだった。

だれも口を利くものはなかった。息を吹き返したように八木が怒号した。さすがの普蕭も困惑を泛べる。叭羅蜜斗も引き攣って笑わなかった。イタルが喚く。

「Are you feeling good?」

その夜のライブはすべて中止、バンド連中が息巻いた。八木は弁償とまでは言わなかったが、激怒し、普段の超然とした態度もどこへやら、血相を変えて叱責した。

「いったい、どう云うつもりだ！」

普蕭が謝罪する。

「すみませんでした。迷惑をおかけしました。でもあれが僕らのやり方だったんです。必ず弁償します」

叭羅蜜斗も仕方なく、合わせるかのようにわけもわからずに無言で低頭している。イタルは無表情に不思議なものを見るような眼で八木を見つめ返した。スツールに脚を組んで坐りながらカウンターにもたれて頬杖を突くＲＺＤが笑っている。が、眼は雀燥していた。

「二度と顔を見せるな」

八木が最後にそう言い放って背を向けた瞬間、イタルは聞こえるように嘯いた。
「ふ。それがどうした。
もう『ＢＬＵｅＺ』は卒業したぜ」
八木は一瞬振り返り、ものすごい形相でにらんだが、それだけだった。再びつかつかと歩き離れる。
かくして『ＶＶＷ』は晴れて出入禁止の身となり、叭羅蜜斗も不貞腐れ、普蕭でさえも意気消沈した。
ライブ・ハウスを出るとＲＺＤらが薄暗く汚れた歩道に屯してしゃがんでいた。楽夏もいた。頬を膨らませてイタルをにらんでいる。『ＲＺＤ』は今夜の審査に合格し、大方の予想どおり出演権を獲得していた。
ＲＺＤ独りが立ち上がり、近づく。
「最高に安っぽいパフォーマンスだったぜ。おまえらしい、セルロイドやブリキの玩具だ。モンキービジネスだったぜ」
「つまり勝ったのは俺たちさ。
貴様は太った豚だ、自家撞着だ」
「ふふん。だからどうした。最高だろう？　おまえなんかが理解できないぐらい、成層圏の彼方までぶっ飛んでいるってことさ。
俺はな」
互いに面白がるように相手を眺めて薄笑いを浮べる。
「また会おうぜ、イタル」
「ふ」
ＲＺＤが背を向ける。楽夏もぷいっと向きを変えてイタルを見ない。彼らと入れ替わるかのように十数人の若者らが現われた。立っていたイタルら二人はたちまち囲まれた。
「こっちへ来いよ」
路地裏に牽き擦られた。袋叩きに遭う。
グランジ系の『レイプ』とロカビリーの『へいりぃ』とが特に執拗だった。『へいりぃ』のギタリスト、〝ロックンロール〟敦史は倒れているイタルの頭を蹴って最後に捨て科白を吐く。
「頭に乗んじゃねえ」
襲撃者らが去ると無言でイタルは立ち上がり、なにごともなかったかのように埃を払った。
「斎生、もうおまえとはやっていられないぜ、イタルよ」

叭羅蜜斗は鼻血を噴きながら喚いた。

イタルは少しも抵抗していなかった。叭羅蜜斗は持ち前の腕っ節で相手のうち一人を叩きのめしていた。普蕭は割りと被害が少なかった。元『ＲＺＤ』の名ギタリストに多少の敬意が払われたのだろう。一番悲惨で、殴られるにままに任せて服はぼろぼろ、鼻の曲がったイタルは蔑むようにその鼻を鳴らす。

「ふ」

その日以来、イタルは姿をくらました。逃げた、隠れた、ほとぼり冷ましだ、と言われたが、再び彼が姿を現わしたときはだれもが驚愕した。顔の半分が鯱鉾のように逆立つ青い龍の刺青に覆われていたからである。

額の左半分が蛇行する青い龍神の尾に占められ、瞼を跨ぐ先には左頬に躍る四肢、くねる胴体、玉をつかむ龍爪、龍首は唇の左傍らを長く伸び、顎の左に続いて雷霆のごとく縦裂けた双眸の瞳孔、峻なる牙、炎爛たる舌が喉仏の脇にあった。

刺青には相応の時間がかかるものである。イタルの精緻な刺青は線彫りだけでも一ヶ月を要した。昔ならばいざ知らず、昨今の電動式では面積の割に期間の長い方であろう。彩色にはさらに一ヶ月。青龍の鱗はまるで彼の皮膚が鱗状になったかのようにリアルであった。施彫の間、イタルは市街のタトゥー専門店に通う以外は殆ど外出せず、学校へも登校しなかった。県条例で未成年の刺青は禁じられていたが、余りに凄すぎてボディペイントだろうぐらいに考えられ、後日、刺青をさらして街歩きをするようになってもだれにも本当の刺青だとは思わなかったものである。

だが完成の日までは、彼は常に包帯をし、両親の問いにも応えなかった。奇行に慣れ、半ば諦めていた父母は深く追及もしなかった。

級友らも親も或る日突然、顔面の左半分を青龍の刺青に覆われたイタルを見たのである。

驚愕で紅潮した担任はすぐさま彼を教科（英語）室に連れた。イタルは英語主任と担任とに挟まれた。生徒指導（体育・剣道）も現われる。

「それを落とせ」

イタルは無表情に黙っていた。

「なぜ黙っている。なんとか言え」

そっぽを向く。

「よし。生徒指導室に来い」

彼は追随した。生徒指導は濡らしたタオルを渡そうとする。

「とにかくそれを落とせ」
イタルは嘲りを泛べた。
「なにがおかしいんだ」
彼は俯いてぼそっと言う。
「どうやったらタオルで落ちるのかな、って思ってね」
「なにっ？」
「そんな拷問があったような気がする。なるほど苦痛は世界の王だ。胸を破る心の痛み、肉を炙る苦しみの前ではだれもが崩壊する。教師ってのは真実の奥義を教授することが仕事らしいね」
「なに。貴様」
「タオル地で擦って皮膚を剥くのかって訊いているんだよ」
「どう云うことだ」
「だから冗談じゃねえ、って言っているのさ。いいか、こいつは Tattoo だぜ。皮膚移植の費用を出そうって言うなら考える余地もあるがね。
タオルでなんか無理だよ」
散々説教され、親が呼ばれたが、イタルは知らん顔で通した。その間は教室の方も騒がしかった。一度話題が終わってもすぐその話に戻る。昼休みまでには学校全体に伝播した。
「奴ならいつかやると思っていたよ」
叫羅蜜斗はにやりと笑い、得意げに言った。
「それが奴さ。やらずにはいられないんだ。他人が嫌悪の気持ちを抱くとなればなおさらだ。奴はとっちゃ、そう云う行為を Pretty って言うんだ」
生徒指導から漸く解放され、親に引き渡された彼は烈しく訴える母を無理やりに先に帰し、普蕭と叫羅蜜斗とを呼び出した。校舎に附帯する非常階段の踊り場だ。熱く強い風が吹いていた。
「活動を再開するぜ」
イタルがそう言うと、叫羅蜜斗が喚く。
「あたりまえだ。おまえが勝手に消えちまったから止まっていただけなんだぜ」
普蕭は考え深げに頷いた。
「そうさ。
むろん僕らは負けたわけでも、道を閉ざされ、行き場を喪ったわけでもない。だめになった

わけでもなく、なにかに縛られているわけでもない。活動再開は当然だ。しかし凄いことをしたもんだな、イタル。Crazyだよ。

新境地を開いた君が復活して第一にやりたいことはなんだ」

「もう人の前で歌うのは飽きた。俺の音楽をだれにも聴かせたくない。

悪鬼羅刹にでも捧げるか」

叫羅峯斗が声を上げた。

「よし、決まったぜ」

普蕭が怪訝な顔をする。

「って、なにが決まったんだ?」

叫羅峯斗はけろりと言う。

「なにも。

ともかくそう云うことさ」

三日後、地方紙の社会面に小さな記事が載った。

『　県立高校生が深夜の古刹で乱行、県指定文化財あわや

昨日深夜、真神郡畝邨（ほむら）村の古刹に大音響が轟き、静かな農村の住民を驚かせた。この騒音による通報を受けた駐在署員の応援要請により現地に薙久（なぎくさ）駅交番からパトカーが出動、周辺は一時大騒ぎとなった。

騒ぎの原因は同村の貞観止國寺にある能舞台で県立真神高校二年生の生徒三名が深夜十一時過ぎからロック・バンドによる演奏を行ったことによるもの。少年ら三名は『薪能』と称し、かがり火も焚いていた。

警察に制止された少年らは早朝、保護者とともに補導センター職員に引き渡され、今後指導を受けるとのこと。補導の際、少年らは警察に抵抗し、一名は『これは悪魔への共感を晰らかにするための儀式だ』と意味不明な言葉を喚き続けた。なお、機材を運ぶために少年一人が農協の軽トラックを運転。無免許であった。

同寺の能舞台は元禄年間に建造され、県の指定文化財。あわや出火の事故となる惧れもあったことから、所轄の消防署も保護者と真神校とに対して厳重注意を行い、県教委もこれを重大視している。

同校校長のコメントによれば……』

しからば当然、村に轟き渡った最初の曲はいかにもなローリング・ストーンズの『悪魔への共感』（Sympathy for the Devil）だった。警察や消防からたっぷりしかられ、学校は停学処分となり、バンド活動の完全なる禁止を申し渡された。ＲＺＤは話を聞いて大いに笑ったものである。

「やられたぜ！」

彼のバンド活動もまた事実上、停止の状態であった。せっかく出演権を獲得したライブ・ハウスでの演奏活動も審査の日の演奏が最後で、学校にも完全に行かなくなり、その意味はだれにもわからなかった。動こうとしないＲＺＤの許に、バンドのメンツが訪れてもラリってばかりで話にならない。春慶はほかのバンドからの誘いを真剣に受け止めていたし、大楽などは公然とＲＺＤ抜きでの新バンド構想を披露していた。

イタルは事件の翌日の夜、携帯電話で楽夏の番号を呼び出す。

「なんでよ、なんであんたがわたしの携帯番号を知っているわけ！」

彼は侮蔑の口調で応えた。

「ＲＺＤの携帯で見た。

それがどうした？」

益々荒くなる彼女の声。

「それがどうした、だって？　だって覗いたんでしょう！」

「最低だって言いたいか。ふ。

だから電話してるんだぜ。そのぐらい、わからねえか」

『さけんな、わかるかよ』

イタルはそんな言葉を無視し、

「ＲＺＤはどうしている？」

「は？　知らないわ」

「奴は電話に出ない」

「そう。

だったら勝手に行って見てくればいいじゃない。そうすればわかるよ」

「奴は焦燥しているんだ」

「どう云うこと。どうしてそんなことが言えるの」

「ふ。俺に勝てないからだろうな」

楽夏の息を呑む音が聞こえた。

「なに言っているの？　あんたたち負けたじゃない。マジで莫迦じゃないの」

「莫迦？　ふ。知らなかったのか？」
「もう切るよ」
「たぶん奴はドラッグに溺れている。
今まで以上に」
彼女の声が止まる。漸く拗ねた声で、
「わかっているんならどうにかしてよ」
「奴がそれを望んでいるならな」
「どう云うこと」
「ふ。
奴はＲＺＤだぜ」
「意味わかんない」
「俺がPrettyなのと同じさ」
「ああ。
そう。
もういい。それがなんだって言うの。
ほんっと、あんたとは話していられないよ」
「よく言われる。
おまえが明日、ＲＺＤのところへ行かないなら、俺が行く」
「わたしはしばらく行かない。行けないから。来るなって言うのよ。
で、それがなんか関係あるの」
「別に。
異常なのさ」
「知っているよ。気味のわるい刺青して。ほんとうの莫迦だよね、学校に来て欲しくないわ、気持ちわるいから」
「奴が俺に勝つ方法はいくつもない。それに勝ってもなんの栄誉もない。勝つことに意味なんかない」
「なんなのよ、唐突に」
「いや、もういい」
受話器の向こうの沈黙。
「ねえ」

「なんだ」
「あんたたち、どうする気なの」
「なにが」
「これからよ」
「俺はＲＺＤのところへ行く。それだけだ。奴に会うだけだ。
Nevermore」
「なんなの、それって。そうじゃなくってバンド！　だよ。あんたたち、はっきり言ってもうだめじゃん。なんにもできないよ」
「いや」

その直後、イタルの携帯電話が鳴った。少し待った。鳴り続けている。出た。普蕭だった。
「どうしてすぐ出なかった？　どこかへ抜け出したかと思ったぞ。今この電話は叭羅蜜斗とも繋がっているんだ」
三人はそれぞれの家で蟄居中の身であるところから、こうして電話でしか話し合えなかった。その時点までは。
「それでよ、どうする？」
へらへら笑いながらの叭羅蜜斗の声に対し、少し怒り気味の普蕭の声。
「どうするって？　それをこれから話すんだ」
「だからさ、八方ふさがりじゃないか、俺たち。これで終わりかな。まあ、やるだけのことはやったって感じだしな。
これ以上はもうないだろう」
「ふむ」
普蕭も言葉に詰まったようだった。
「そうかな」
黙っていたイタルが口を開いた。
「まだだ。
まだ満足できない。
終りなんかない。終わることなんかできやしない。制御不能のマシンだ。在るのは、それだけさ。ほかにこの世の価値になんか意味があるか？　すべては保身だ。すべては自己弁護だ。

自己肯定のための醜い虚偽に過ぎない。

『いかなる党派にも属さず、あらゆる党派を倒すであろう』

サン・ジュストの最後の演説だ。その後、彼は死刑宣告にもギロチンのときにも沈黙を守り通した。

なにもかもが無意味だ。意味なんかない。逆さ吊りにされた生首みたいに、狂笑してやるんだ」

叫羅寧斗の自棄気味の声。

「ちぇっ。

そらあ、威勢がいいがな。実際、どうすりゃいいんだ。俺たちはおまえの望みどおり聴衆のないパフォーマンスまで演じたんだぜ。それ以上のステージがあるか」

「『新能』はほんのエピソードだ。或いはイントロか、プロローグでしかない。ほんとうの現実はこれからだ」

叫羅寧斗の声は止まった。少ししてから曾蕭の問いが聞こえる。

「どうする気だ」

イタルは胸壁に立って城砦を囲む数千の敵兵を睥睨する暴君のように告げる。

「どうにでもするさ。

どんなふうにでも。

どこでなにをするかなんて関係ない。そんなもの糞だ。いつどこでなにかをしたから偉大だって言うんだ。偉大だからなんだって言うんだ。迎合主義だ。ごまかしだ。

キューバ革命を知っているか。

フィデル・アレハンドロ・カストロ・ルスはキューバに上陸するのに十人乗りのボートに八十二人を乗せた。動くこともできない。二基あるエンジンは交互に故障し、船足は進まず、嵐も来た。最悪だ。航程は三日も遅れた。そんなことも知らずキューバ内地で準備していたフィデルの仲間が到着予定時刻にサンチアゴ・デ・クーバで武装蜂起し、全滅した。海を渡って来るはずの革命戦士たちが来なかったからだ。

フィデルたちは遅れた上に予定の着岸地点に到達しなかった。殆ど難破同然でキューバに上陸した。たちまち政府軍に発見され、襲撃され、なんとか逃れるも数日後には農民の裏切りに遭い、バチスタ政府軍の奇襲を受けた。彼らは山中で二、三人のグループに分かれ、万が一の場合の集結地点であるモンゴ・ペレスに向かう。フィデルは七日間、飲むことも食べることもできなかった。二週間後に到着し、その二日後に遅れて着いた弟のラウルを含む四人と合流し

た。

彼らは再会を喜び、そしてフィデルは言った。

『ライフルが七挺。我々は戦いに勝ったぞ』

さすがのゲバラも聞いて呆れたらしい」

イタルは笑いながら続ける。

「わかるか。フィデル以外の人間なら壊滅状態と考え、絶望するだろう。だが現実はそうではなかった。彼は三十二歳で軍事政権を打倒し、キューバ革命に成功した。そう云うことさ」

「わかんねえよ」

叭羅蜜斗の声が割れて響く。

普蕭からは溜息のような言葉が返ってくる。

「わかった。それが現実か」

「ルールはない。また人間どもに見せてやるのさ。狂態をさらしてやる」

叭羅蜜斗の唸りが届く。

「そうなっちまうのかよ。ったく、しょうがねえな」

叭羅蜜斗は就寝の早い年寄りが静まる夜の八時、二階の窓から降りて叔父の家に向かった。母屋から離れて田んぼに隣接した位置に大きな納屋があり、農協のロゴが入った軽トラックがいつもキーを差しっ放しで停めてある。静かな田舎であったが、エンジン音はだれにも気づかれなかった。普蕭の屋敷へ向かう。

普蕭の邸の前では、イタルが歩哨のように立っていた。そこでもやはり納屋は母屋から離れて田んぼに接している。普蕭本人は納屋に封印されていたドラム・セットを持ち出す作業をしていた。叭羅蜜斗が到着すると、三人は金具やボルトをうまく使ってドラムスや椅子やらハイハットやらを荷台に手際よく固定する。アンプ類も載せた。紐で結んでシンバル類を鳴らぬように工夫する。

農道に一台のバイクが停まった。叭羅蜜斗が手打ちして振り向く。

リーゼントを潰したくないのでヘルメットを被らない、『へいりぃ』の敦史だった。

「おまえらなにしてやがるんだ」

普蕭が応える。

「君には関係ないさ」

唾を吐く敦史。
「懲りずにまたやらかす気だな」
イタルはあけすけに言った。
「ああ、そうさ。安房駅前あたりでぶちかますつもりさ」
ちっ、バレちまったんならしょうがない、と云うぐあいに叭羅蜜斗も息巻く。
「それともなにか、また俺とやろうって言うのかい」
悪態を吐いてバイクは去った。
「やばいかもな」
叭羅蜜斗がぼやく。普蕭が冷めた顔で言った。
「問題じゃない」
イタルは嘲笑う。
「ふ。Coolだぜって言えよ、叭羅蜜斗」
そう言いながら小型のポリタンクの入ったスポーツ・バッグをゴム製のロープで縛りつけた。
出向くと安房駅のロータリーに一人の警官が巡回している。神中州駅も同じだった。警戒、と言うほどではない。
「チクられたのかもしれないが、大した様子じゃない。一応通報者に敬意を表している程度のものだ」
普蕭は分析してそう結論した。イタルが決する。
「演奏時間は一秒でも長い方がいい。公園へ行こう」
夜十時、トラックは神中州中央公園に進入し、恋人たちで賑わう大噴水の前に乗り上げた。
園内はむろん車輛の進入禁止（それ以前に無免許だが）である。一吾の発電機を動かす。
「エルネスト・チェ・ゲバラに捧げる！」
イタルの絶叫でゲリラ演奏が始まった。アベックらは驚愕する。
叭羅蜜斗の単調なベースが同じ音を刻む。イタルのギターが間断的に、落下するギロチンの刃のように挿し込まれる。普蕭がスティックを取り上げ、スネアをマシンガンのように打ち、タムタムに走る。暗雲のように膨らみ、なにかを孕み、なにかの始まりを告げるかのようであった。ギター挿入の間隔が徐々に狭まり、緊張を迫り上げる。間断がなくなり、切迫した連符となってうねりを作った。ヤマタノオロチが蛇身で大地を叩いて山を潰しながらのたくるかのような轟音となる。普蕭がシンバルを激しく連打し、中近東の音楽を連想させた。それを合図に一瞬ブレイク、静寂。

途端に騒音の塊のようなイタルのギターが叩きつけられた。ミドル・テンポのドラミングが始まり、イタルはそこに規則的に音の塊を落下させる。シカゴ・スタイルのブルースだ。青龍の刺青が紅潮して蒼く燃え上がる。輪郭が眩い白燐に縁取られながら赫奕する。

血に塗られたかの緋髪が焔と化して躍り上がった。それを呆然と見上げているカップルもあれば、顔を顰めながら面に刺青の男などに拘わり合わぬが無難とばかり早々引き上げるのもいる。懼れてか、ブーイングなど一切ない。髪を乱し、涎を垂らして白目を剥き、軽佻浮薄な歌詞を挑発的な嘲りの狂態で吼えるイタル。

沙漠の犬が吼えている　おまえもいつも乾いている　だが平気
俺は**Squeezer**　おまえは**Lemon**　だからおまえは**Squirt**　**Honey Do It**

俺は自由さ　気楽極楽軽佻浮薄　**So What**　**Blues** 歌うぜ
俺は**Vacant**　おまえが**Violate**　**Forever Virgin**　**Do It**　**Do It**

演奏は長く続けられなかった。パトカーのサイレンが聞こえた。警官が降り、走り迫って来る姿が見える。叭羅蜜斗はベースを振り上げた。イタルが叫んだ。「『Real』だ！」それは曲の名だった。**Blues Harp** の独奏で詞も伴奏もない曲。彼は狂おしく**Harp** をめちゃくちゃに吹く。そして荷台に飛び乗り、二リットル入りの小さなポリタンクをスポーツ・バッグから持ち出す。噴水にぶち撒く。ガソリンが入っていた。

「やめろ、イタル！」

ドラムを中止して普蕭が叫んだ。だがイタルは普蕭から借りていたギターに残りの数滴を垂らし、火を点じて噴水盤に放った。炎が凄まじく噴き上がる。

「ちぇっ、やば過ぎるぜ！」

叭羅蜜斗が青ざめる。イタルは炎を眺めた。警察官に両腕を捉えられても薄笑いをしていた。

「美しいね、イーリヤ」

消防車のサイレンが鳴り響く。三人は警察署へと連行され、保護者が呼び出された。

父親がイタルを叩く。

「莫迦野郎、貴様と云う奴は！」

イタルは唾を吐いて憑かれた者のように罵り返した。挙句に哄笑する。

安房署の少年留置に（勾留に替わる観護措置として）十日間、独房留置され、取調べを受け

た。取調室での聴取のほか、現場へ行ったり、検察庁へ出向いたりもした。移動中は手錠がかけられる。独房にいるときはなにもせず過ごすしかない。十日が過ぎても留置のままであった。どうやら取調べが終わるまでは少年鑑別所に送られないようであった。

漸く検察官から家庭裁判所に事件の送致があったらしく、イタルたちは鑑別所へ送られる次第となる。鑑別所で四週間の鑑別期間を過ごした。所内では各独房に二人ずつの割り当てである。

一番危惧されたイタルは自虐的なまでに優等生であった。また顔の刺青ゆえにトラブルを巻き起こしやすいとも懸念されていたが、少なくも表面上は巧みに処世し、なんの騒動も起こさず、起こされもしなかった。同室の少年はあらかじめ刺青のことを言い含められていたし（それでも最初は両眼を丸くしていたが）、当時所内で最も優良な者（意図して配置したわけではなかったとのことであったが）でもあった。イタルは図書室での読書を特に希望し、死人のように精読した。

親権者の調査も終り、鑑別期間が終了すると家庭裁判所で審判が行われた。裁判官、書記官、調査官、それに鑑別所職員が加わって行われた。本人、親、弁護士が立ち会った。教師はだれも来なかった。事実認定や要保護性の審査を終え、保護観察処分が言い渡され、イタルの親は弁護士に豪奢な祝儀袋に包んだ金七拾二萬五阡圓也を支払った。帰宅した日、イタルはＲＺＤの死を知った。

死体の発見者は楽夏だった。南西に向いて黄昏の光が深く差す部屋の中央に紙屑に囲まれるようにうつ伏せで斃れていて、死後数日が経過していた。時間が止まったかのようにその眼は開いたままであった。

彼女の悲鳴で人が集まり、救急車が来る。死因は急性心不全。だれもがドラッグのやり過ぎだと考えた。イタルは帰宅したその日の夜、暗い部屋で膝を抱えてずっと考え込んでいた。微動だにしない。

鳴り続けていた電話に漸く出る。携帯電話から叭羅寧斗の軽口を装う声が聞こえた。

「仕方ないさ。元気出せよ。それとも追悼コンサートでもやるか」

イタルは乾いてかすれた声で応えた。

「俺は普通に元気だぜ。

追悼か。おまえらには、いや、俺たちにはできやしない。だれにも追いつけまい。奴は先に逝った。きっと今ごろはこの俺を見下ろして驕り高ぶった嘲りの微笑を泛べているぜ。

しかも奴は自ら命を絶ったのではない。野垂れ死にも同然だ。愚かな、悲惨な死だ。世間に

認められようもなく、世俗の一切の価値観に異叛している。奴は純粋に逝った。そして死と云う現実をだれも超えられない。死を超えられる者はいない。だれにも触れられない」

沈黙の後、普蕭の言葉が漸く届いた。

「そうだな。僕らは追悼を考えるべきじゃない」

その言葉に気を取り直したような叭羅蜜斗の軽口が入る。

「へへ、どうしたおまえらしくもない。キューバの喩はどうした。絶望も不可能もないぜ」

イタルは冷たく微笑んだ。

「俺は不可能だとは言っていない。死は厳粛だと言っただけだ」

「なんだよ、そりゃあ。どう云う意味だよ」

普蕭の声が叭羅蜜斗の難詰をさえぎる。

「やめろ、叭羅蜜斗。君にはわかっていない。しかし、イタル。

いや、その前に訊くが、君は本気でパフォーマンスだったと思っているのか」

「コンセプチュアルさ。だが叭羅蜜斗、安心しろ、どうってことない。最初からなにもかもがPunkだからな。ふ」

イタルは電話を切った。

午前零時を過ぎた。

イタルは携帯電話の番号を押す。

「Hello, My Love！　ふ、俺だ。ゾンビさ。火炙りにされるために墓場から戻って来たぜ。敗残者、反純粋主義者、腐った死に損ないだ」

間があいた。楽夏の声が強く切り出してきた。

「ねえ、イタル。あんた、聞いているんでしょう、ＲＺＤのことよ」

「むろんさ」

「それならなんでそんなことが言えるの！　彼を止めてくれるんじゃなかったの！　あんたが莫迦なことしている間に、死んじゃったわ！」

「Very Very Well - done」

楽夏が息を呑む音が聞こえた。

「ねえ、まじめに答えてよ」

「なんだ」

「こうなるってわかっていたんでしょう？」

「ああ」

「それなのに、なぜ」
「皆いつか死ぬ」
「莫迦野郎！　わかっているよ、そんなこと！　そんなことしか言えないの！　いつもいつもあんたはどうしてそんなに莫迦なの！」
「Vacantさ。それっぽっちだ。Cheapだぜ。
ふ。路傍の石か」
「は？」
「死ぬ瞬間に奴はなにを考えたかな」
楽夏が洟を啜る音がした。待った。
「イタル」
再び聞こえたとき、彼女の声は落ち着きを取り戻していた。
「ふ」
「あんたの負けね。そうでしょう？
ＲＺＤの勝ちね」
応える。
「当然さ。そうあって欲しいし、そう努めてもいる」
切られた。

家の玄関から公然と出る。月が照らしていた。すべてが白と黒とで静止している。両親祖父母はともに寝静まっていた。警戒されていないことを不思議と当然のことのように感じた。あたかもシッダルタが城を抜け出した深更、父王も家来も侍女もだれもが眠りに沈んでいて気がつかなかった故事に似ている。イタルの唇が微笑（アルカイック・スマイル）のかたちを做した。
秋月とちぎれ雲との上空では風が強いらしく、霧降るように照らされた道は頻繁に翳された。畦道に方形に区切られた水田は鏡面のようだった。田舎路に人気はなく、清々しかった。楠の老大樹の下に風雨に磨耗した道祖神があり、路がそこで分かれる。彝之本家の大屋敷が山を背にしていた。そちらに歩が進む。イタルは黙然としたまま、とりとめもなく考えながら粛々と歩いた。
身体から燐のような炎が燃え立つ。一歩一歩踏む度に立つ砂埃が火焔のようでもあった。瓦の聳える屋敷を迂回し、真神山の麓に着いた。真神郡一帯で最も崇敬され、神聖視される霊域

だ。山の頂に見上げる月光が浩々と凄い。真神山は山と言えるほどの高さではなかった。海抜百数m、しかし山頂に巨大な磐代がある。磐には上から下までアルファベットのI字形の亀裂が走り、その姿形が亢龍に似ているところから地域の龍神信仰と古代から地元の趨勢であった彝之家とにちなんで彝龍之裂と呼ばれていた。昭和五十六年の調査で四世紀の甕や甕の土器片や土偶など祭祀の跡が発見されている。圧倒的な神威を以て石刀のように縦に聳える大磐は高さ八mであった。

人が死にたくない、すなわち個体としての自己の存続を望むのは子孫繁栄への生存の原理が働くからである。人が時に我が子や恋情のために自己の生命を犠牲にすることは個体存続の欲望と矛盾しない。また子孫への志向を一種の自己超越行為と考えるならば、なおさらだ。人が自己犠牲や死を憚れぬ態度に本能的に崇高さを感じるのは、全存在者に命題として自己超越が刻まれているからである。歴史に残らぬ人たちが実際にここで祭祀を行っていたと云う事実に思いを馳せるときにも、これと同じ原理が働く。

雑木の小枝をかき分け、草を踏み分けた。自分自身を脱ぎ捨てようと欲してあがきもがくかのごとくに歯噛みしながら、噴く汗が火の粉と舞うほど我武者羅に登る。海鳥島の城塞都市アルカサルの喧騒が聞こえ始めた。

頂上に立って大磐を見上げた。イーリヤの幻想が鮮やかに翻る。磔刑を見上げていたときの自分を思い出す。

彼女が牽かれ出ると怒号交じりの歓声が上がった。無責任な大衆の怒り、憎しみ、それは残忍で恐るべきものだ。庶民の憤懣や僻みや嫉み、辛酸と屈辱とを舐めさせられ続け、虐げられた人間の心にある捻じ曲がった復讐根性。冤罪であるか否かは問題ではない。裁きは溜飲を下げさせるのである。民衆にとって公開処刑は格好の見物、娯楽でしかない。

蒼穹を背景にイーリヤは磔にされた。

黒い油がバケツ数杯分撒かれ、点火される。一瞬で爆発のように燃え上がった。群衆の声はさらに烈しく、波浪のようにうねる。煙が丘の上の強い風のために斜めに流れる。この場所が選ばれるのは煙ですぐに窒息死させないための工夫だ。窒息死できないとなると人間は炙られ続けることになる。人間は焼かれただけではなかなか死ねない。骨が露出するまで肉を炙られても死ねない。絶命に至るまでは凄絶な場面が繰り返されることになる。

彼女も炙られ始めは身をもぞもぞとさせるだけであった。それでもかなりの熱さを堪えてい

る。

だが炎が二m弱に近づくと縛られた手足を引きちぎろうとするかのように激しく上下に悶絶した。髪が縮れる。叫びが上がった。凄絶な表情。炎がイーリヤの足先に届く。もはや彼女の動きは常人のものではなかった。意識を失う。だが一瞬だけだ。あまりにも熱いために意識が戻る。その間一秒もない。意識が戻った途端、弾かれたように身を仰け反らせ、絶叫。凄まじい熱さで意識を喪失。飛び跳ねるように意識を取り戻す。狂ったように叫ぶ。これがいく度もいく度も繰り返された。人間の光景ではなかった。

イーリヤの着物一片が火の粉となって胡蝶のように舞いながらスローモーションでイタルの顔に落ちかかる。彼は右手で払った。そして叫んだ。

数人の刑吏がイタルを押さえる。彼は虚空を、私をじっと眺め、言った。「そして俺は拿捕を免れようと身を挙き千切るように暴れ、益々躍るよう叫び続けるんだ」

贅沢なお世辞でも言ったかのように豪奢な憂いの微笑を泛べてみせる。

私の喉がからからに干乾びるまで容赦なく叫びは続いた。なにかが臍下丹田から顱頂骨を抜け、爆裂の哄笑となる。イタルが哄笑していた。砕け散るシンバルの燦々たる響きのような哄笑であった。嘲るような、媚びへつらうような、下卑て、理性を喪ったかのような凄まじい哄笑であった。唾液を垂らし、這いつくばるような、天翔け裂けるかのような、けたたましい哄笑であった。まるで残虐な蒼穹だ。

炎が磔の尖まで上がった。

彼女の踵の肉が焼かれ、骨が露わになる。着物は焦げ縮れたぼろ屑となり、髪はないも同然。もがき方も猛烈で、既に正気ではなくなっていた。それでもまだ死ねない。人間は骨が露わになるまで焼かれてもまだまだ死ねない。

火炙りにされる者の最終的な死因は心不全だと謂われている。

磐は苦生して黒々と聳え、手がかりのまったくない絶壁を做していた。磐の頂上までイタルがどうやって這い上ったかは、だれにもわからない。ガソリンを被るとライターを点じ、最後の絶叫とともに逆さまに墜ちた。